

中学生と高校生の調理に対する意識の比較

松崎巖 ○安藤美紀子 (共立女大)

【目的】現代の食生活の問題点の一つとして、食事の外部化があげられる。そこで家庭調理の重要性について指導する必要があると考える。本報では家庭調理の重要性を意識的に指導した中学生と、特に意識しないで指導した高校生の調理に対する意識の比較と、今後の調理学習に役立つ指導法に関して何らかの示唆を得たいと考え本研究を行った。

【方法】調査対象は中学生は筆者が指導した私立中学生授業前後とも334人、高校生は筆者が指導した私立高校生と都立高校生の授業前303人、授業後312人に対して質問紙によるアンケート調査を行った。調査項目は家庭での食生活の実態、学校での調理学習、今後の食生活の意識についてである。

【結果】①家庭での食生活の実態について、授業前の調査では調査実施年が2年後の中学生の方が食事の外部化の増加が認められ、また中学生、高校生共わが家の味が「なし」と回答したものが2割強もみられる。②学校での調理学習の授業後の成果については、中学生は技術面、高校生は健康面、経済面の成果をあげている。成果の理由として中学生は、わが家の味または得意料理の調理テストで自分一人で調理したことをあげ、高校生は学校で習ったことを家で実習したことをあげている。したがって高校生のホームプロジェクトは一年間の授業の中で位置づけることが効果的と考える。③今後の食生活の意識を数量化Ⅲ類で分析すると、中学生は冷凍、加工食品を否定して手作り重視を志向し、高校生は一家だんらんの健全な食生活を志向している。外部化意識は家庭調理の大切さを意識的に指導した中学生の方が減少している。したがって学校での調理学習の意義が認められる。